

給銀ハ海路中ハ其半ヲ與フヘシ

棟梁其妻ヲ帶ルヲ許ス唯第十人迄ヲ許ス

既ニ到ルノ後一年之後其極ヲ廢セントスル者三月之間無

料ニ勉ムヘシ其歸ヤ自分之費入ナリ

四年ヲ經ル者商便船ヲ以テ政府ヨリ戻スヘシダラズ百枚位

若年限中病アレハ能ク診療之上歸國スヘシ但シ飛脚船ヲ

用テス

職人死スル者妻アレハ飛船下ノ中ニ乗セ戻スヘシ

職人居屋什器ヲ政府ヨリ與ルヲ得併主官此ヲ糾正ス

若シ病ムハ横濱海軍病院ニ於テ養看ス

療治中半給金ヲ受クヘシ

一日之中十時ヲ勤ムヘシ若事急ナレハ邦官佛官相議シテ

更ニ業ヲ勤ムヘシ日曜ハ佛工三分之一ヲ勤ム可シ

邦官ヨリ佛工ヘ命スルアレハ佛官是ヲ與知スヘシ

佛工邦工ト爭鬭スル及ヒ口論スルヲアレハ邦官ヨリ佛官

ヘ告クヘシ其罪共ニ議ス

若重科ナレハ横濱岡士ニ告クヘシ

邦官佛官ト佛工ヲ叱責スルハ五日ノ無給金ヲ罰ス其上

之科ハ岡士ニ告テ後チ罰ス

給金ハ佛政府ノ極ハ主官一人ヲ除キ餘三官ハ佛ノ極メ一

月洋銀四百弗

棟梁ハ一月百五十弗 下職一月七十五弗

是概畧ト雖モ其佳ナルハ二十枚ヲ増スヘク劣ナルハ二十
弗ヲ減スヘシ

政府ノ爲大功アル職人ハ給金ノ二割ヲ増加ス
佛ノ職人佛政府ノ請合ニテ三月之給ヲ與フヘシ到着之後
六月働キ三月之給ヲ受クヘシ

職人横濱ニ到ルキ佛岡士館ニ姓名届出ヘシ

受狀寫ハ岡士館ニ出スヘシ

議論アレハ受狀通ニ取扱フヘシ

日本職人ノ事

役人紀正官一人

計司一人

職方計司一人

藏庫改役一人

職人改役一人

通詞

一人

職人其業ノ近キ所ニ從テ從事スヘシ

給料計司ノ議ニ從フ又佛三官ノ請ニ從ヒ其給料ヲ増スヲ
聞クヘシ

邦棟梁下職共其業ノ昇達ニ從ヒ立身サスヘシ

職人成ルタケ不替ヲ好トス其業モ進ミ會計亦ヨシ

職人都テ佛ノ下職ニ見習フヘシ

邦職人一日ノ勤業邦官佛官ト議スヘシ先ツ佛工之通り十

時ヲ以規トス急業アレハ亦佛工ニ準ス

休日ハ邦之仕來ニ從フヘシ

若業ヲ怠レハ佛官是ヲ告ク邦官此ヲ罪スヘシ

佛下職邦職人ヲ打スレハ邦官是ヲ佛官ヘ告ケ罰スヘシ

守衛兵士四處ニ建ツヘシ

一處十二人ツ、ナルヘシ都テ四十八人ヲ用ニ其置場ハ佛

主官ヨリ指示スヘシ

邦ノ少年才子ヲ撰テ是ヲ習熟シ佛ノ三官ニ換ルヲ要スヘ

シ

此人通詞トモニ職人未來之前每朝蒸氣ノ學ヲ作スヘシ佛ノ三官亦間ニ從ヒ教訓ス

佛ノ諸職棟梁ハ邦ノ職人ノ善者ヲ誘シ朝夕ノ閑時ニ傳習スヘシ

晚ハ畫繪ヲ學ヒ佛ノ製鐵所ノ規則ニ從フヘシ製鐵所政令

佛主官日本政府共ニ直ニ談判スルヲ許スヘシ時々日本官吏ヲ一和スルヲ得レハナリ

主官日本掛リ役々主官ト爭議アレハ日本ノ高官御老若方ニテ判斷スヘシ

主官三月ニ一度ツ、會計ヲ呈スヘシ且其後ノ三月ニ用ユ

ル金貨ノ數ヲ豫告スヘシ需品ヲ購スル左ノ如シ

邦官何之品ヲ買ント云フ佛官之ヲ可否ス

簿書ハ邦語佛語二通ニ認ム庫簿ハ邦語而已ニテ可ナリ

製局部分アリテ各其部長各其所主計ヲ收ム可シ

佛國政府ヨリ購求スヘキ諸品

修船諸具 製鐵諸器械 蒸氣ハ凡ソ五百馬力ノ積ナリ

入用諸式銅鐵其外日本ニテ出來迄欠用物

是等日本役人佛都ヘ赴キ乞買ヲ要ス

其求ムル方佛國各所諸局ヘ當リ求メ其價ノ廉ニシテ品ノ善

ナルヲ撰フヘシ其鑑定ハ佛之三官各其所好ニ任セ其望ム

處ニ從フ

諸品買ヒ求メ佛之或ル港ニ持テ船載運送ノヲ佛政府ヨ

リ慰懃誠飾シテ送ルヘシ
運送ノ仕方佛主官ノ命ニ從フ次第順序ヲ追ヒ遞送スヘシ
其機械ノ次第ニ從ヒ其事ニ從フ職人ヲ并セテ載セ送ルヘシ

勘定物高

蒸氣諸道具 六十万フランク 造船修船諸具 二十万フランク

諸職人邦佛共居屋 四十万フランク 運轉蒸氣諸具 十万フランク

銅鐵其外諸入用品 三十万フランク 諸品運送職人船賃 五十万フランク

日本使人入用 十万フランク

總メ二百二十万フランク 爲弗三十七万弗

日本ニ於テ入用之積リ

最初ヨリ政府ニ心ヲ用ヒ力ヲ盡シ日本國內ヨリ入用諸品

ヲ出スヘシ無據品ハ外國ヨリ求ム可シ

國內遠方ニ産スル品物鑑定ノ爲佛職人ヲ遣スヘシ併シ政府之都合ニヨリ命令ヲ受ヘシ

日本ニ於テ諸品ヲ求ムルハ邦官是ノ價ヲ定ムヘシ

外國品ハ佛人は是ヲ極メヘシ

邦内品價貴ケレハ外國ヨリ求ムヲ便利トス

可成丈ケ邦官ハ佛官ノ心ヲ扶ケヘシ居宅石塀築立等邦官

之ヲ辨スヘシ

造船其外蒸氣等取立方ハ都テ佛官之教ニ從フヘシ

能前諸件ヲ堅確ニシ誤ナカラシムル爲ニ後ノ條約ヲ立ヘシ

横濱製鐵局ハ速ニ取立ヘシ船々之修復速ニ出來スルヲ要

トス

勘定諸入用ハ洋銀貳万フランクヲ用ユ其餘五万フランク
ハ職事ニ取掛ル爲メノ入用ナリ

其内横須賀ニ於テ地所ヲ築定スル圖ノ如クシ地ヲ埋ル亦
圖ノ如シ屋二字ヲ築テ細工所二ヶ所ヲ設ケヘシ

日本海軍方ニテ横須賀灣之測量圖ヲ出スヘシ

堅石二百五十間六面ノ入用ヲ定ムヘシ
赤青色

次石二百五十間六面ヲ用ユ
青白石

石灰或ハ石灰未火ヲ不經ルモノ二百五十間六面火山ノ灰
七百五十間六面石炭一千噸ヲ辨スヘシ

此諸品ヲ辨スルノ後日本役人佛國ニ赴クヘシ職人來ル後
空手ノ日ナキ爲ナリ

佛ヘ行ク役人ヲ佛ノ主官マルセリ——迄使節ヲ迎ヘトロシ
ヘ行日本ノ爲製鐵所ヲ一見シ日本ニ取建ル規模ヲ畧々知
ルヘシ

ハリスニ行テ使命ノ趣ヲ告クヘシ

主官使節ノ爲ニ旅館ヲ世話周旋スヘシ

次三官ヲ求テ速ニ使節ニ面謁セシムヘシ此時諸圖ヲ呈シ

諸機械ヲ求ムルヲ決ス

當年佛ノ十月製鐵所諸器械佛京ヨリ船ニ乗スヘシ修船工
一併ニ乗スヘシ修船主官ハ此時飛船ニテ來ルヘシ

已ニ日本ニ來ル先細工所ドック職人居宅庫藏小ドックヲ
營作ス

使節ハ十二月パリスヲ出立スヘシ此節最後入用ノ諸械ヲ

併セ載セテ來ルヘシ

此時佛上主官共ニ來ル

一千八百六十九年二月一日製鐵所之日本職人都テ佛人ノ指示ヲ待タス獨力肩任スヘシ

前文慶應元年四月之處先是肥田濱五郎ヨリ造船場地所ノ見込書ヲ出タセシト有リシモ今散亡シテ知ルニ由無シ因テ同人荷蘭國ヨリ歸朝之後再ヒ申出テタル書付ヲ以テ其意見之趣旨ヲ知ル可キ爲メ左ニ記之

製鐵所御建興地所之儀ニ付利害取調候趣申上候書付

肥田濱五郎

私儀去ル申年亞行御用中彼地ニ於テマリ―子アルセナ―

ル海軍造營場之義以下其外諸製作所等細觀歸朝致候後度

々建白仕候通海軍造營場ト唱候場所ハ蒸氣機械同釜製作所大小鍛冶場同銅鐵鑄物場造船場修船場綱具絢立場同貯所帆縫所同貯所木材挽割所同圍場大小砲車臺并小銃臺製作所大小砲置場彈丸貯所小銃鎗鉄刀等之武器貯所水夫病院等ハ不及申兵糧油木炭石炭筆墨紙蠟燭水夫胴服同冠物履等ニ至ル迄軍艦所用之義ハ悉皆具備仕平常修復ハ勿論總テ軍艦打建ヨリ戰地ニ仕出候迄右壹ヶ所ニテ万事差支無之様設有之候ヲ即海軍造營場ト相唱候間既ニ海軍御開キニ相成候上ハ速ニ御取建無之候テハ不相成義ト奉存候尤右造營場御取建相成候テモ是ヲ護衛スルノ兵備無之戰爭之節若敵ニ奪ル、ニ至リ候テハ彼我地ヲ換却テ味方ヲ

破ルノ器ヲ製スル所ト相成候事故能其地理ヲ熟考シ砲戰ニ不拘辨利之地ヘ取建是ヲ守リ候タメ堅牢之砲臺ヲ築キ置候ハ造營場之定法ト承リ申候依之御國內地理之利害ヲ勘考仕候處此上追々海軍御盛大ニ相成造營場一ヶ所ニテハ御差支ト申次第ニモ至リ候ハ、其節ノ形勢ト後來ノ模様ヲ合考仕猶五六ヶ所モ御取建相成可然御儀ニ候得共差向當節御取建可相成地ハ江戸内海之外可然地無之候尤内海ト申候テモ手廣ニ付尙此内ニ地理之善惡有之候間見込之場所等兼テ申上置私和蘭滯在中同國海軍ミニストル之見込書等相添尙彼地ヨリ再應建白仕候得共別ニ御卓見等被爲在候御義ニ候哉此度相州横須賀表ヘ海軍造營場御取建之義御治定相成既ニ經營之御模様乍見受愚意申上候ハ

恐入候得共同所ハ地理不宜哉ニテ石川島ヨリ越中島州崎モヨリ之方至極可然地理ト奉存候間何卒同所ト御場所替相成候様仕度依之兩所之利害左ニ奉申上候

一相州横須賀之方ハ岸深ニテ大船之入津モ自在ニ候間其場所而已ニ取候テハ至極可然哉ニ候得共一体之地形ニ取候得ハ右等ニ難換之凶害有之候其故ハ第一海口ニ近ク興行深カラサルヲ以テ敵船之彈丸造營場ニ相達シ可申哉縱令彈丸不達候共右様之地理ニ於テ海陸ヨリ攻來リ候敵ヲ防候ニハ如何様之砲臺ヲ築候共防禦無覺束儀ト奉存候自然防禦ハ出來候トモ敵船此冲合ニ縱横致シ我軍艦之通路ヲ妨候ハ、兼テ太平之日多分之入費ヲ以テ戰爭之用ニ設候場所期ニ臨其功ヲ奏セサルヲ以テ殆贅物ニ異ナラサル而

己ナラス尙莫大之武器ヲ備ヘ多分之兵卒ヲ分チテ是ヲ守
ヲサレハ右ニ有之候處之武器兵糧其外一切之機械忽敵手
ニ陷リ味方ヲ破ルノ大害ト相成候間無餘儀贅物ヲ守リ候
歟或ハ莫大之國用人力ヲ費戰爭之用ニ設ケ候場所其節ニ
至リ取毀候歟兩様之外策有之間敷哉奉存候尤兼テ建白仕
置候通江戸海口富津觀音崎十國臺旗山猿島等之要所ヘ巨
大之御臺場ヲ築キ尙其間ニ裝鐵之蒸氣浮臺場ヲ備ヘ是ヲ
外廓ノ虎口ト被遊羽田邊ヨリ品川沖手ニ御臺場ヲ築キ同
小形裝鐵蒸氣船ヲ備ヘ之ヲ内廓ノ虎口ト被遊候得ハ横須
賀ハ稍外廓門内ニハ候得共前條申上候通り造營場者實ニ
大切之場所ニ候間内廓之内ニ可有之筈ト奉存候其上同所
ハ如何ニモ海口ニ近ク殆戰場同様ニ候間戰爭之節自然不

穩且絶ス砲聲之耳ヲ貫キ候等ヨリ下賤之職人共不得安心
逃去候ハ必然之義ニ付造營場ハ無事ニ候共更ニ其用ヲナ
シ難ク候加之万一外廓相破レ候節同時ニ造營場贅物ト相
成候歟或ハ敵手ニ陷リ候テハ内廓之防禦モ亦百倍之苦心
ヲ醸シ候義ト奉存候殊ニ外廓之御備向モ中々御大業ニテ
急速御出來之義如何可有之哉何レニモ御不辨利之義耳ト
奉存候

一石川島越中島邊ハ品川沖ヨリ直徑凡三里餘モ有之候間敵
船之彈丸造營場ニ達スヘキ患モ無之且万一敵手ニ陷リ候
時ハ江戸ト共ニ候間則内海戰爭之結局ト奉存候乍併海底
遠淺ニシテ大船之入津不辨ニ候間此度和蘭國ニ於テ御買
上相成候バツヘルモレシ

是ハ水底ヲ淺ヒ候蒸氣機械ニ
御座候右功用ハ別紙内海淺方

繪圖面ニヲ以テ我軍艦之自在ニ入津可致程新ニ濬ヲ掘リ
添有之候
其土ヲ以土手水門等ヲ築キ別紙圖面之通り其内ニ軍艦之
溜リ所ヲ拵ヘ且右造營場守衛トシテ堅牢之御臺場御建築
有之度義ニ付夫等之御入費ハ中々不少御儀ニ候得共右臺
場之義ハ造營場之有無ニ不拘御府内御警備ニ必可有之筈
ト奉存候左候得ハ一事兩用之義ニ候間横須賀之方ヨリ却
テ御入費ハ御手輕ニ相當リ可申哉元來海軍造營場之所要
ハ戰爭之用ヲ主ト致シ候義ニ付期ニ臨ミ其功ヲ奏セサル
様ノ地理ヘハ如何程御出方相減シ候共御取建被遊間敷義
ニテ縱令御出方ハ相當候共非常之節御用立候地理ヘ御取
建相成候社御當然之義ト奉存候且右様ノ造營場御府内近
傍ニ有之候得ハ諸民其機械之辨利ヲモ悟リ自然自力ヲ以

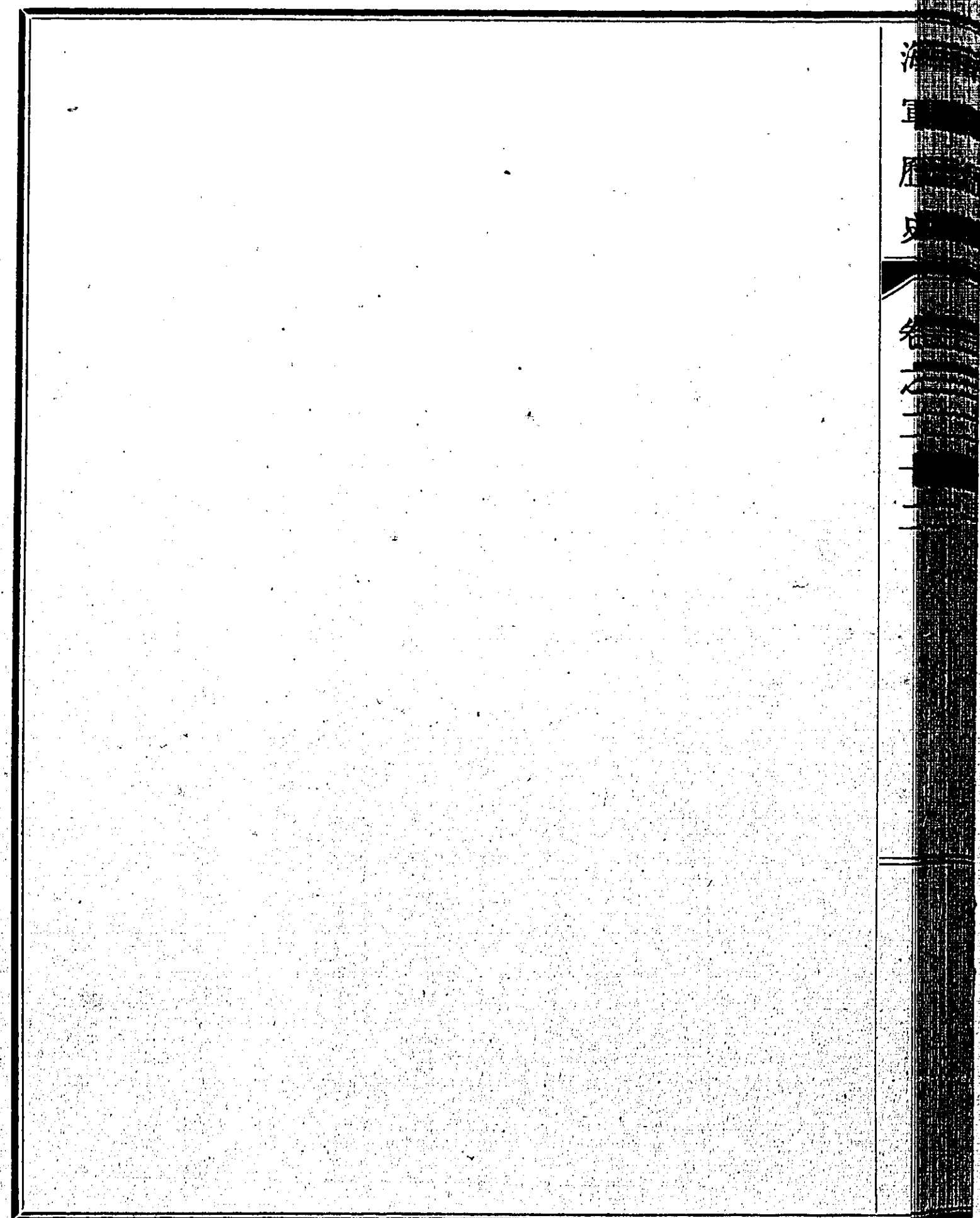
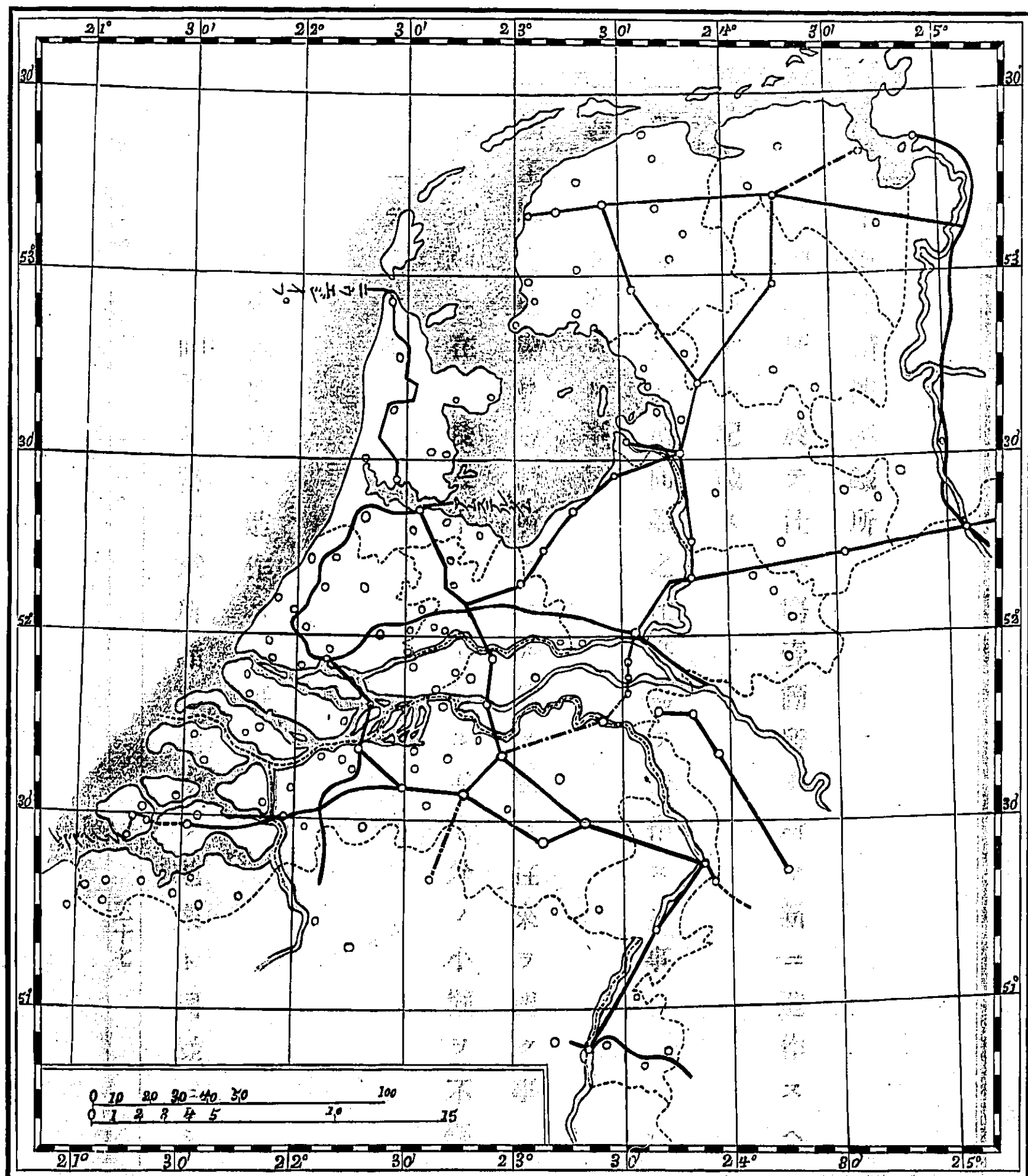
他ノ諸機械ヲ求メ或ハ木材ヲ挽或ハ織物ヲ織候様相成民
間利用之道等御開キ旁一ツハ人知ヲ起シ候一端ニモ相成
可申哉殊ニ御府内ニ候得ハ諸職人モ得易ク且邊鄙ヘ御差
遣シ相成候ヨリ自然役々之御宛行諸職人共賃銀モ御手輕
ニ付多年之内ニハ右等之御利益モ不少義ニ有之且前文申
上候ハツヘルモ―レンヲ以品川御臺場内手ヲ浚ヒ水流ヲ
安ク仕候得ハ年々堤川除ケ等之御入費モ相省ケ隨テ川上
之水損モ減シ諸廻船之入津モ辨利ニ相成候事故右ハ相當
之石錢御取建相成候得ハ夫是之御利益ニテ追々ハ造營場
御臺場等之御入費モ御取戻シニ相成候譯旁地理ト申實ニ
十全之義ト奉存候
右申上候件々ハ先年中ヨリ諸書籍ヲ調ヘ或ハ其道ニ巧者

ナル者ニ承リ候義ニテ猥ニ管見ヲ主張致シ候義ニハ決テ
無之候尤佛人ハ横須賀ノ方ヲ可然地理ト申上候哉ニモ承
知仕候得共和蘭海軍ミニストルハ別紙之通り石川島越中
島之邊可然旨申之候且昨年中英佛蘭三ヶ國海軍造營場ヲ
歴觀仕候ニ和蘭海軍ミニストル之論尤穩當ト奉存候既ニ
和蘭ニ於テモ別紙同國小全圖之如ク海口ニ近キフリッジ
ンク井ニウエジイフ之海軍造營場ヲ不殘アムストルダム
ヘ可引移之議論有之由右ハ初代ナボレヲン之築候巨大之
砲臺有之私共見受候處ニテハ實ニ堅牢ト奉存候程ニ候得
共夫スヲアムストルダムヘ引移候位ニ付夫是ヲ推考仕候
テモ横須賀ハ不可然地理ニ候間何道御入用ヲ被爲掛候義
ニ候ハ、同所ハ速ニ御差止被遊出格之御英斷ヲ以直ニ石

川島越中島之方ヘ御場所替被仰出候様仕度尤右ハ何レモ
國家之安危ニ拘リ候大事件ニテ中々拙文ヲ以難申盡繞ニ
九牛之一毛ヲ申上候義ニ付尙委細之義ハ御尋問被成下候
得ハ見聞之事實巨細可奉申上候依之和蘭海軍之ミニスト
ルヘ地理之善惡問合候節之返答書并和解洋板江戸海圖小
和蘭全圖品川沖御臺場内浚方築建方繪圖及ヒバツヘルモ
―レン圖相添此段奉申上候

寅八月

此書面ニ添ヘタルモノ都テ畧スルモ讀者ノ解シ難キニ苦
シム程ノヲモ有之間敷ト雖モ唯就中地形ヲ例スヘキ和蘭
國小圖一葉ノミヲ茲ニ附シ置ク



海
軍
史
卷
之
三
三



日本海軍横濱製鐵所

方今當製鐵所ニ於テ仕事場壹箇所并所々新ニ造作スヘキ場所等ハ左ニ記載ス

- 一銅工場側ニ壹箇所同職之仕事場ヲ造作スル事
- 一鍛冶場ヲ廣ムル事
- 一銅工場之鑪場ヲ壹箇所ニスル爲メ新ニ往來ヲ開ク事
- 一機械所前ニ在ル長八十一メートル五十分ノ小堀ヲ不殘板ニテ塞ク事

第一

一銅工場ヲ壹箇所新ニ造作スル事
此ノ場所ノ地業ハ當製鐵所諸部建物ノ地業ト同様ニシ

第二

テ日雇人足ヲ使用スヘシ此ノ仕事場ノ巾ハ十二メートル建方ノ模様ハ現在之仕事場ト同様ナリ此ノ仕事場ノ前面ハ閉塞スヘカラス且土臺石ハ現在之仕事場ノ土臺石ト同様ニシテ高サモ相違ナカルヘシ此仕事場ヘ二ツ之入口戸ヲ附クヘシ尤一ツハ銅工場ヨリ鑛場ヘ往來ヲ開クニヨリテ其所ノ入口戸ヲ除キ此處ヘ取附今一ツハ同様ノ戸ヲ新ニ造ルヘシ此ノ入口ノ兩脇ヘ硝子障子ヲ附クヘシ

現在ノ銅工場ヘ此ノ銅工場ノ新ノ間ハハシエー
鐵板ヲ附置ヘシ尤此ノ鐵板ハ製鐵所ヨリ渡スヘシ且屋根ハ諸向建物同様ノ瓦屋根ニ致スヘシ

水ヲ洗ス

第三

鍛冶場ヲ廣ムル事

鍛冶場ハ圖ノ如ク一ト間廣ムヘシ尤造方模様今迄ノ通りナルヘシ

此ノ所地業并土臺石据付ハ皆日雇人足ヲ使用スヘシ

第四

銅工場ヨリ鑛場ヘ往來ヲ開ク事

此ノ往來ノ巾三メートル六十分ニシテ兩側ハ板ニテ張兩側ニ一ヶ所入口并硝子障子ヲ附ヘシ

此ノ所ノ屋根ハ兩仕事場ノ屋根ヨリモ低クシテ高サ地ヨリ棟迄四メートルニ過クヘカラス

機械所前ニ在ル長サ八十一メートル五十分ノ小堀ヲ塞

候事

此小堀ヲ板ニテ塞ク爲ニハ新ニ杭ヲ打込ムヘシ
此ノ杭長五メートルニシテ二十分角ナリ二十分角ノ方
ハ小堀ノ岸ニ向ケ打ヘシ此ノ杭ハ大抵一メートル五十
分ノ距離ニ打込ヘシ尤今迄有ル分ハ其儘置ヘシ且此ノ
杭ノ上ヘ渡ス材木ハ杭ト同角ニシテ杭ヘ切ハメ其上ハ
長二十二分巾二十五分釐ニテ打附ヘシ
杭ノ員數百八本渡シ木五十四本要ス板ノ厚五分
圖ニ小橋ヲ記セシ所ハ非常用意之タメ勿橋ニ致スヘシ
右ニ記載セシ造作ハ引請ル者ヘ命スル覺書
此ノ建物ヲ引請ル者ハ常ニ是ニ注意スヘシ職人等ヘ能
ク指圖スル事肝要ナリ

諸材木ハ皆當製鐵所ヨリ遣スヘシ尤其員數ハ日本役人
書留置時々細工場ヲ見廻ルヘシ

此ノ引請人ハ建築方佛人指圖ヲ請若引請人ノ過チニテ
仕損有之時ハ同人ヨリ償ヲ出スヘシ此ノ引請人ヨリ差
出ス處ノ見積書ハ横須賀製鐵所首長ヘ差出シ一覽致サ
スヘシ

此ノ建物ノ上ニ使用スヘキ鐵物類ハ當所ニテ渡スヘキ
哉引請人ヘ尋問致スヘシ

此ノ造作用ノ諸品ヲ買求ル事ニ付引受人ヘ金子ヲ渡ス
事アラハ其金高并其段ヲ首長ヘ告知セシ上ナラテハ渡
ス可カラス此ノ引請人ヘ渡スヘキ職人等ノ給料ハ造作
成工ノ上ニテ渡スヘシ

横濱

千八百六十六年

十二月廿四日

建築方

フロラン

製鐵所首長

ウエルニ―承屈

江戸千八百六十七年七月廿一日

石工左官職業ニ用ユル品々出產場所々々へ一見トシテ趣
キ候義ニ付モツシユ―ル、フロランヨリ差出候書付ヲ台下
ニ送ル右ニ付製鐵所諸建物取建方ノ仕法ヲ得タリ

諸建物ノ土臺ハ石ヲ以テ築ク可シ屋根ハ瓦ニテ覆ヒ木柱
ヲ以テ右ヲ請ケ可シ間仕切ハ煉化石ヲ以テ造ルヘシ
火ヲ怖レル役所并倉庫等ノ建物ハ都テ石并煉化石ヲ以テ
取建可シ右建物ニハ材木ヲ用ヒ候場所ハ床板屋根并内造
作而已ナリ

水中建築ノ類ハ―トル石^{人造}ヲ以テ築クヘシ

波戸場并修船場入口等速ニ損ス可キ場所ハ堅石ヲ以テ築
ク可シ

此廻村ニテ研究イタシ候最重大ナル儀ハ運送方不便ノ儀
ナリ牛馬共良ク世話行届居候得共其數充分ナラス屢人肩
ヲ以テ運送スルヲ見タリ大原又ハ隔リシ道路ニテ蒸氣車
發明前歐羅巴ニ於テ陸運送ニ用ヒ日本ニ於テモ數箇所ニ

テ用ユル處ノ荷車壹輛ニモ行達シ事ナシ石産所ヨリ海岸迄廿五町位ノ處ニテ請負人ノ益最少カル可シ

三ツノ産物ノ爲其運送方ニ付製鐵所ヘ格別ノ損毛トナレリ依テ的當ト思フ處ノ補ヒ方ヲ台下ニ勸ム

第一 海岸ヨリ三里半ノ場所ニ於テ天城山中ニテ其不融土ヲ焼立方致ス可シ一見スルニ是迄極上品ノ土ヨリ掘取ラス並土ノ方ハ石ノ近邊ニ差置ケリ右ハ後年道路ヲ妨ク可シ並土ノ方ヲ以テ最宜敷不融煉化石出來可シ且極上ノ方ハ鑄物所釜其外不融品物ヲ造リ又並ノ方ヲ以テ釜取建ノ爲鍛冶所并鑄物所等ノ用ヲ爲ス可シ

最可然仕法ハ其産スル所ノ場所ニ於テ焼方ヲ爲ス可シ且同様ニ水并砂共充分アリテ極上産物ヲ儉約ヲ以テ焼立方

出來可シ

海岸迄運送方ハ既ニ附居候道路ヲ最容易ニ運送出來可シ右仕法ハ別段金銀ヲ費スニ及ハス

横須賀製鐵所并江戸大砲鑄立所ノ入用ノミニテ右職業充分有ルヘシ當時ノ所ニテハ焼立方等ヲ見分致シ候役人置商人ヘ不爲請負右役人ニ爲取扱候事最簡易ナル可シ

第二 是迄製鐵所ニテ用ヒ來リシ火山灰ハ大島ヨリ出產セリ右島村役人共高山ヨリ三里ノ間馬ノ背ニテ運送致ス事ヲ申立格外ノ直段ヲ申立タリ

伊豆國ニ於テ濱村網代ノ間ニ海續キノ道ニテ同種ノ火山灰ヲ見出セリ同所村役人共ハ大島役人ヨリ安價ヲ申立タリ併イタリヤ國ヨリ來ル所ノ火山灰ヲ佛國海岸ニテ買求

候直段ヨリモ未タ高價ナリ若政府ニテ大島又ハ伊豆國ノ
内耕サ、ル場所ニテ火山灰ヲ相對ニテ堀取ルヲ免許ア
ラハ製鐵所ニテ入札ニ致シ最可然方便ヲ得ヘシ

第三 武藏國數箇所ノ商人共ヨリ買入候石灰ハ不絶同品
ニ無之其故ハ石灰石撰ミ方并焼立方ニ充分意ヲ用ヒサル
故ナリ依之石灰石ヲ製鐵所ヘ取寄同所ニテ建築方ノモノ
世話致シ焼立方ヲ致ス可シ然ル節ハ運送賃ヲ以テ出來上
リ直段ノ畧元トナル可シ

右運賃ヲ減シ候ニハ玉川淵ニ有之處ノ石灰石ヲ用ヒ船ニ
テ運送ス可シ石灰石出產ノ場所ヨリ羽村迄年中數月ノ間
川船通行出來可シ

羽村ヨリ府中迄之處川中砂利多ク夏ノ間大水ノ節ニ無之

テハ船通行出來難シ府中ヨリ此方ハ常ニ通船自由ナリ

羽村ヨリ府中迄之間良道ヲ作り候場所又ハ容易ニ通船出
來候様府中迄一里之間堀割ヲ拵候場所所有之ヘシ

右ハ政府ニテ被取行候様予台下ニ願フ處仕法ナリ

總体ニ田畑開ケタル國內且幸民ヲ一見シ感セシヲ予台

下ニ告ケスシテハ此書翰ヲ書終ラサル可シ併ナカラ予廻

村セシ處ヤニツル一ボ一綿羊其外ヲ育フ可キ大原アリテ

其毛并皮等此國ニ拂底ナルコトヲ見且屢川ヲ越スニ其流

急ニシテ入費ナク莫大ノ力ヲ得ル處ノ水車ナキヲ予甚歎

セリ

極上產物ノ爲伊豆國ノ内ニ場所アリ右ハ製鐵所ニテ最用

ユル處ノタン類ノ製法等ナリ

ベタイル類ハ充分同所ニ在リ尙右數ニテ増ス可シタンハ
シエ—ン樹又ハ外樹木ニ多分アリ

皮ヲ洗ヒ且タンメ道具ヲ動ス爲ノ河水充分アリ最宜敷場
所ハ河津ノ谷中ナリ

右ハ容易ノ產物ニテ今巴里斯ニ在ル日本商人ノ一人ハ免
許ヲ與ヘハ其製シ方仕法ヲ易ク習ヒ得ヘシ製シ候品ハ不
殘政府ニテ買入候約定ヲ爲ス可シ尤十ヶ年ノ間ハ日本ニ
產スル所品ヲ歐羅巴皮直段ヲ以テ買入ヲ約ス可シ
右益ヲ以テ日本商人其目論見ノ爲安ク金ヲ出ス可シ大君
政府ノ爲少シノ入費ナク莫大ノ一ツノ產物ヲ得可シ

台下ノ忠僕
製鐵所首長

ウエルニ—

京極主膳正台下

製鐵所首長

モンシュール

ウエルニ—ヘ

貴國七月廿一日附之書翰落手一覽致シ候處製鐵要用ナル
物品出產之場所ヤ一見トシテ被相越右廻村ニ付横須賀
表建築之仕法石灰并山元ニテケレ—ト燒方其外運漕之辨
タン獸皮製シ方等懇篤ニ被申聞逸々了解セリ石灰廻シ方
ニ付玉川堀割之義ハ野州之石証一見致候上尙被申聞候筈
小栗上野介ヨリ承知セリケレ—ト之義ハ山元ニテ燒立候
積是又同人ヨリ引合及ヒ候通り可取扱者人撰シ横須賀ヘ
可差遣間可然教示頼入候其餘之箇條モ可成丈ケ追々處置

及ヒ候様可致ナレモ尙談判及ヒ候廉モ可有之ト存候右ハ
懇切之教示ヲ謝センカ爲メ此段及回答候謹言

慶應三卯年六月八日

京極主膳正花押

此數節栗本安藝守今の氏の手録せる横濱半年録と名つ
くる冊子に載たり頗る横須賀造船所開設の原由を知る
に足るを以て借抄して爰に掲く蓋し氏曾て箱館に在て
佛國人と親交ありし此時監察を以て横濱に在勤し在
りて當時之實況を逐一書き綴りたるあり

一日小栗上野介予の官邸に來り云先年佐賀より政府に納
めし蒸氣修船器械一式あり蓋し鍋島閑叟翁其國に取建る
心組ふて和蘭より購はるる其取建費の夥多あると其之次

掌る人あきを病み政府に納めて用を爲さしめんと欲せり
あり其器械三分の二は既に運ひて當港石炭庫に在り一分
は猶長崎港にあり客歲既に相州貉ヶ谷灣に於て此器械を
以て「ドック」及び製鐵所を取建んとし既に掛り役員も定め
測量迄も爲したれど其業は馴れし人無きを以て明めたれ
と許多の器械を錆腐に付して閑叟翁の芳志を空するに忍
ひし兄此回翔鶴を修むるに用ひたる佛人「ドック」を
率ひ貉谷に至り一ト骨折して呉ては如何と左も無造作に
話出せし予「ドック」の名さへ始めて聞きたる程かれは況や
製鐵所などい如何ある物あるやも知らず且ハ佛人「ドク
トル」輩を備ふは縦令當人の承知せざるも水師提督や公使
の意中も測り難けれは遽に諸せは上野と共に今夕佛館に

往て同く議し然る上は其請ニ應じと答へたり上野茲
に於て其僕を金川驛に遣し其旅館を定め予と共に佛公使
館に就き其由を語るにロセスも其業に暗けれハドロート
ルの果して其任に適じとすべきや否やを判じたる能はず此に於
て一价を馳せて水師提督ジョウライスはジョ
ーライス上野の來るを知り使と共に公使館に來り其談を
聞て後答へて云ドロートル年猶少ふして學も未だ深うら
ず故に既に成る物に守る能ふへいと雖も新に造る業に覺
束あり本船一等蒸氣士官シンソライと云ふ者あり此人今
私事を以て上海に行と雖も早晚歸り來れハ此者歸り次第
其器を點檢せしめ然る後確と報すへいと茲に於て談止み
て歸れり

セミヲミース艦乗組士官蒸氣方シンソライ上海より到り
佐賀献納蒸氣製鐵器械を熟觀するの後提督ジョーライ
ス公使レヲンロセスを以て申出る趣に該器械の義に惣体
小振りにて從て馬力も強からされハ鐵具小補理を辨じ
よ足る迄の用ひて迎も「ドック」を造り大仕事を倣ひ得べき
物にあらす且「ドック」を造り船艦を造り出す如き大事業
ハ中々我々輩學術の能く成就す可きよあらされハ是に其
任に堪へたる然るべき人を撰みて別ニ雇ふに有らされハ
叶間敷且該器械に之を横濱近傍に据付小修復に備へられ
なハ至極用便ある可き旨ありしハ出府して小栗氏は相
談を遂けしに既に軍艦を有する以上を破損ハ有中の事あ
れハ之を修復するの處無うる可らも況や唯今迄の如く彼